近代日本における中国語教育と冰心

——倉石武四郎の中国語教育を中心に[1)]——

宮　本　めぐみ

はじめに

本稿は日本における冰心作品の紹介・受容の一側面として、戦前から1950年代前半にかけての日本における中国語教育の状況と、倉石武四郎による中国語教育改革、及びその改革に冰心作品がいかに寄与したかを紹介するものである。

冰心作品の日本への紹介に関する主な先行研究には、萩野脩二『謝冰心の研究』[2)]と虞萍『冰心研究——女性・死・結婚——』[3)]がある。この二冊は2009年、2010年と続けて出版され、目下のところ日本でもっともまとまった形の冰心の研究書である。

萩野の研究によると、冰心は1930年代後半の日本において、早くも時代遅れの「過去の作家」と見なされていたが、その一方で過去の作家として忘れ去られるどころか、逆に続々とその作品が紹介され始めたという。このギャップに驚いた萩野は、1920年代から30年代にかけての日本における冰心紹介の資料を調査し、上記の論考をまとめている[4)]。

一方、虞は冰心が生涯で8回訪日し、講演や座談会で日本の知識人と交流を深め、日中友好に貢献したことを紹介し、それにも関わらず日本の研究者は冰心の作品に注目せず、評価もそれほど高くなかったとしている。

両氏の論は、共に日本における冰心評価は低かったという認識に立っている。その上で冰心文学の魅力を訴えているが、萩野も指摘しているとおり、1930年代後半から冰心の作品は次々と翻訳されてもいるのである。

戦前から冰心作品を高く評価し、翻訳・紹介した人物に、倉石武四郎がいる。

倉石は京都帝国大学、東京帝国大学の教授で、古典文献学、清朝小学の研究者であるが、その一方で中国語の教育活動にも力を注ぎ、1930 年代末から精力的に中国語のテキストを編纂、1950 年からは民間の中国語講習会を主宰し、定年後は中国語辞典の編纂にあたったことで知られている。

倉石は冰心との交流や翻訳作品数では群を抜く人物だが、萩野は倉石についてはいくつかのエピソードを散発的に紹介しただけで、二人の交流にはあまり注目していない。虞も、冰心が倉石に請われて東京大学でおこなった講演『中国文学をどう鑑賞するか』が活字化され、出版されるに至った過程や、倉石によって翻訳された冰心作品の全タイトルを紹介し、「日本の学者が冰心を知るのは、倉石の努力と切り離して考えることができない。倉石は冰心を日本に紹介するにあたって、最も貢献をした人物であると言っても過言ではない」としつつも、「冰心の一部の作品が日本で訳されたとは言え、彼女自身についての研究、あるいは彼女の作品に関する研究は極めて少なかった。倉石でさえ、当時冰心の作品に関する論文を発表したことがなかった」[5] と述べている。

確かに倉石は冰心作品の翻訳に徹し、研究論文は書いていないが、その作品を中国語のテキストに収録することによって、多くの学習者に冰心を認知させた。日本における冰心作品の紹介・受容において、それらのテキストの果たした役割は小さくない。戦前から「過去の作家」と見なされ、研究対象となることが少なく、評価の低かったとされている冰心だが、当時の日本における中国語教育の状況や、倉石の中国語教育改革との関わりを考えると、一定の評価を与えられていたと言えるだろう。翻訳されたり、テキストに収録された作品は、数ある作品の中から選ばれて日本人の目に触れることになった中国文学作品だからである。

一

上述の萩野、虞両氏の著書でも取り上げられているが、冰心の作品を最初に日本語に訳して紹介したのは、日本人ではなく、周作人である。周作人は友人からの手紙で、日本の新聞に冰心の小説「愛的実現」の内容を誤解し、嘲笑し

た記事が掲載されていると知り、また日本の雑誌に掲載される中国の白話詩にもしばしば誤訳が見られることから、もし中国人が訳せば、たとえ文章がうまくなくても、意味は間違わぬだろうと、自ら翻訳することにしたのであった[6)]。萩野の研究によると、この新聞記事とは1921（大正10）年8月15日、16日に『読売新聞』に連載された池田桃川「支那現代の小説」で、日本で最初に冰心の作品に言及したものなのだが、「池田桃川には多くの事実の誤認」[7)]がある。周作人も「この記者が『愛的実現』を誤解したのは、彼自身中国語がわからないせいだろう」[8)]と書いているように、池田は「愛的実現」をきちんと読んで理解することができておらず、それにも関わらず「支那現代の小説は小説として殆ど無価値であり何等の創作的生命を有してゐない」「私等の支那創作に対する期待は当分絶望であらう」などと書いている。これは当時の日本人の中国現代文学に対する理解や中国語読解力の程度を端的に示しているといえる。

ここで、近代日本の公的な中国語教育機関がどのようなものであったのかを見ておきたい。

1871年明治政府が外務省の管轄下に漢語学所を設立。その後文部省管轄の外国語学所となり、東京外国語学校（いわゆる「旧外語」）、東京商業学校、東京高等商業学校附属外国語学校へ改称、移行を経て、1899年東京外国語学校（いわゆる「新外語」。現在の東京外国語大学の前身）となった[9)]。

英・独・仏の三カ国語の公的な教育機関は、中国語とは別系統で、江戸幕府の洋学所、蕃書調所、洋書調所を源流とし、明治には開成所、開成学校となる。東京外国語学校（旧外語）設立時に一時的に中国語、ロシア語と一緒になるが、同校が廃校となる際に帝国大学の予科にあたる大学予備門に吸収されている。1886年に第一高等中学と改称、やがて第一高等学校（現在の東京大学教養学部の前身）となった[10)]。

英・独・仏の三カ国語は日本の近代化に必要な言語とされ、帝国大学やその前身というエリート養成校で教えられていたのに対して、中国語は商業学校、外国語学校で教えられたのである。

安藤彦太郎は『中国語と近代日本』の中で「明治以来、日本で中国語が学ば

れて久しいが、英語やドイツ語、フランス語などが、主として相手の文化を学びとるための言葉であったのにたいして、中国語は、文化的背景を無視した実用会話を中心とする『特殊語学』とされ、ごく少数の人にしか学ばれて来なかった」[11] と指摘している。英・独・仏の三カ国語は欧米の先進的な政治・経済・文化を受容するための言語であり、エリートにとっては必修の外国語であったが、中国語は外交、商業のための言語であり、学ぶ者は限られていたのである。

日本は有史以来中国の影響を強く受けてきたが、明治維新後の日本は中国に先んじて近代化＝西洋化の道を突き進んだ。中国の政治・経済・文化は遅れており、学ぶべきことは何もないという偏見が生じ、それは日清戦争後にさらに強まり、中国進出を正当化したい国策ともからまって、中国蔑視へとつながっていったのである。

皮肉なことに日本の「中国進出」に歩調を合わせ、民間では中国語学習熱が高まっていった。安藤によると「中国語は『戦争語学』ともいわれ、日清戦争、日露戦争と、戦争のたびごとにブームがおこったが、その最大のブームは、『満州事変』から『支那事変』にかけて『大陸進出』が叫ばれた時代であった」という[12]。

当時の中国語教育は、実用会話の習得することを目標にしていたため、教師の発音を学生が暗記・暗唱するという教授法が採用された。文法書もなく、「中国語には文法がない」[13] などといわれていた。この時期に日本の中国語教育を担ったのは、東京外国語学校のグループであった[14]。1899 年の東京外国語学校創立から 1940 年代まで、このグループは中国語教育における権威であり、数多くの中国語の教師を輩出し、また多数のテキストを執筆・出版した。

藤井省三『東京外語支那語部　交流と侵略のはざまで』[15] によると、東京外国語学校のグループにも教科書革新運動の起きた時期があり、東京外国語学校（新外語）の出身で、同校の教授となった神谷衡平（1883-1958）や宮越健太郎（1885-1962）等が、1920 年代に実用会話を離れた中国現代文学作品を収録したテキストを編纂している。だが、こうした新しい取り組みは長くは続かず、日

本の中国進出につれて東京外国語学校のグループは日本の中国侵略に迎合していった。

帝国大学やその前身のエリート養成校には中国語を専門に学ぶ課程がなかったが、「漢文」を学び研究する課程はあった。藤井によると「明治 10 年（1877）創設の東京帝国大学には開学以来漢文学科が置かれていたものの、そこでは古典中国文学のみが講義され、しかも中国語ではなく漢文訓読法で読まれていた。明治 22 年（1889）、東京帝国大学でも中国人講師が任命され中国語教授が始まるものの、それは実用語学教育を目的とするものであった」[16] という。

二

倉石武四郎の中国語教育に関する著書に『支那語教育の理論と実際』（1941 年）[17] と『中国語五十年』（1973 年）[18] がある。前者は 1941 年以前の中国語教育を批判し、中国語の教授法の改革を説いたもので、後者は 50 年にわたる自らの中国語学習と中国語教育活動の歴史を書いたものである。

この二冊によると、倉石は 1918 年に東京帝国大学に入学したが、中国語の授業は一年生で週 2 時間、二年生では週 1 時間しかなく、履修者も極めて少なかったという。テキストも辞書も非常に簡便なものしかない時代で、まず問答体の初級テキスト『官話　急就篇』[19] を使って、清朝の生員の肩書きを持つ中国人教師の発音を口うつしでおぼえ、学び終えると、次は「赤壁賦」や「帰去来辞」等を先生に発音してもらい、中国語を習得していったという。やがて英語やドイツ語であれば下手であっても西洋人のよむ通りに発音するのに、漢文だけは訓読し、中国人とは異なる読み方をすることに疑問を抱くに至る。漢文も中国人と同じように発音すべきだとの考えるようになったのである。

倉石が東京帝国大学ではなく京都帝国大学の大学院に進学した理由の一つは、京都帝国大学系の若手研究者が発行していた雑誌『支那学』で、青木正児の「本邦支那学革新の第一歩」を読んだためだった。青木も漢籍を訓読ではなく中国語音でよむよう主張しており、倉石は我が意を得た思いだったのであろう。倉石はその後北京での在外研究期間にこの考えを更に強め、「訓読を玄界

灘に投げすてて来た」[20] と述べている。

倉石は自ら訓読を「投げすてた」だけでなく、帰国後京都帝国大学の授業においても学生たちに訓読を禁じ、中国語音による発音を課した。1930 年に北京から京都帝国大学に戻ると、倉石は魯迅の『吶喊』をテキストにして、これを中国語音で読む授業をおこなったのである。帝国大学は漢文、外国語学校は中国語という時代に、帝国大学で現代文学作品をテキストにして、訓読ではなく中国語音で読むという授業をおこなったのであるから、題材、方法共に画期的なものであった。倉石は試行錯誤をかさねながら新しい中国語教育法を実践していったのである。「大学は何にも中国語を知らない人が入ってきて、三年の間に中国の古典も中国語で読めるところまで訓練しなくちゃならないというわけで、大変な負担なのです。何といっても無理なことですから、いろいろ工夫をこらして、少しでもムダを省いてやりたいと念願しましたし、一方では大学よりもっと早く、そのころのことですから中学校高等学校時代に中国語をやらせる道はないかと、われながら苦労しました」[21] と述べているように、倉石は学習効果を高めるテキストの作成や、大学入学前の中高生から中国語を学び始める環境整備に着手することにしたが、その時に目を留めたのが冰心作品であった。のちに倉石は「現代文学の作品で、なるべく言葉がやさしくてしかも内容のあるものをということであさっておりますうちに、見つかりましたのが、謝冰心先生の作品でした。これならば、多くの人に読ませても、内容もうつくしく言葉もやさしいということで、それをかなり拾いあつめまして教科書の材料にいたしました」[22] と述懐している。

倉石は自分の理想とする中国語の授業を実現するために数種類の中国語テキストを編纂したが、そのうち冰心作品を収録しているものは『支那語読本 巻一』『倉石中等支那語 巻三』『倉石中等支那語 巻四』『寄小読者抄』『南帰』の 5 冊である[23]。

まず、最初に挙げた『支那語読本』は巻一が高等学校一年生向け、巻二が二年生向けで、次に挙げた『倉石中等支那語』は中等学校向けである[24]。倉石は大学入学前の中・高等学校生が学びやすいよう様々な工夫を凝らし、『倉石中

等支那語』には全巻に注音字母を付け、さらに巻一にはレコードも付いている。当時は注音字母の活字がなかったため、わざわざ鋳造し、「相当の苦辛を嘗め（中略）ほゞ理想的なものを作りあげるに至つた」[25] という。冰心の他に朱自清、茅盾、郁達夫、巴金等様々な現代作家の作品が収録されており、これらのテキストで中国語を学んだ学生たちは、初めて現代中国文学に触れる機会を持ったと考えられる。また、『寄小読者抄』は活字の鋳造が間に合わなかったのか謄写版だが、ほぼ全文に注音字母が付けられており、授業や講習会のテキストに使われたようである。

『支那語教育の理論と実際』（207 ～ 212 頁）には、倉石が苦心の末に作り上げたテキストの学習効果を測るためにおこなわれた、中学校での研究授業の様子が記されている。それによると、生徒たちは兵庫県立豊岡中学校の 4 年生で、1939 年 5 月から週 6 時間『倉石中等支那語』などのテキストで中国語を学び、1940 年 2 月 5 日に研究授業の日を迎えている。学習期間はわずか 9 ヶ月である。この日の教材は冰心の「寄小読者」の一節と陶淵明の「桃花源記」で、あらかじめ注音字母を加えてプリントしたものが生徒に配られていたという。倉石は「現代文学が講読に供せられたのは、このクラスとしても最初であり、その内容は非常に新鮮であつたことは、最後に輯録した生徒の感想文によつて明かであるが、わたくしが、意外とばかりに感じたのは、生徒の発音が極めて滑らかなことであつた。（中略）大学生の読みかたは、耳よりも目に頼り、一度頭で考へてから口に発するため、どことなく、ぎこちなさを免れないものであるが、初めて聞く中学生の発音は、ほとんど頭を経由せずに、目から口へと滑らかに流れてゆく」と書き、その学習効果のすばらしさに「一種言ひしれぬ感激を覚えた」という。

なお、『支那語教育の理論と実際』の巻末には「謝冰心の小説を読みて」という附録があり、研究授業で使用された冰心「寄小読者通訊二」の原文と倉石による訳文、生徒の感想文数篇が掲載されている。倉石は「この小説を読んだことは、いろいろの意味で、これらの中学生たちに深い感銘を与へ、その読後感は、たとへ、文章はたどたどしくとも、なかなか興味あるものであり、こと

に、支那語の教材として、突然、小説を与へられた時の感想も、非常にはつきり書かれてゐる。支那語教授の実績を報告する意味から云つても、将来の教材を安排する上から云つても、相当参考になるものと信じ」[26] ると述べている。その中学生の感想文のうち、二篇を紹介すると

かねてから何となく女流作家らしい上品な小説と感じてゐた支那語小説冰心。これを支那語の研究授業の時間に学んだ事は、我等が胸を打たずにゐられなかつた。前日の日曜日、私は一日中、明日の事を念頭に、夢中になつて、小説の解釈に没頭した。途中、自力では到底及ばぬばかりの困難な単語や文章にもぶつかつた。しかし、私は真にこの作者の心となつて之に当り、やつと大体この小説の内容を汲みえた。やはり予想してゐた通り、女らしいやさしい風雅な小説だつた。愈々研究授業の日になつた。先生の御指導によりこの小説の不明の所は明かになり、小説の心を充分味はふ事が出来た。

僕等は今度初めて小説を扱つたのであるが、未だ支那語を習ひ始めてから一年にも満たず、その上小説は初めてで、全く意味の把握に悩んだものである。然し意味の明瞭になった時は実に愉快であつた。何故なら、意味を取る迄に、僕は此の愚かな頭を揉みに揉んだからである。僕の眼に先づ強く映じたものは、文章が美しくやさしく、そして観察が非常に繊細で鋭い事であつた。これは作者が女性なる為でもあらう。この文を若し愛子を失つた母親が読んで行けば、必ず涙を流すであらうと思ふ。僕も此の小説の意味が呑み込めた時、深い感激に包まれたのであつた。そして此の文章の中に拡げられた情形が躍動して、僕の胸に迫るものが有つた。かうして僕等にも多少なりとも、支那小説の意味が分り、音読も可能となつた事を心から感謝した。

いずれの感想文も、中国語の作品を読んだ喜びや、冰心作品から感銘を受け

たことを記している。この『支那語教育の理論と実際』はのちに倉石が「岩波書店から出しましたが、ものすごい反響でした。岩波書店の主人は（中略）この本がたいへん反響をおこしたのをよろこんでくれ（ママ）られました」[27] と書いているほどなので、中国語教育に関心を抱く多くの人の目にとまったことであろう。冰心の「寄小読者」は中国の児童向けにかかれた作品であるが、このように日本で中国語の初学者に読まれ、中国語教育の推進に寄与していたのである。

さらに、倉石の影響が帝国大学だけでなく、外国語学校にも及んだことは、当時の状況からすると特筆に値する。倉石が「寄小読者」翻訳中に作った小さなプリントが大阪外国語大学の教員の目にとまり、それまで交流のなかった帝国大学系の学校と外国語学校が連携する端緒がひらかれたという。倉石は「謝冰心先生が、どこかで導いてくださったなどといったら、おかしいかも知れませんが、これはすくなくともわたくしにとって大変しあわせなことでした。同じようなことをやりながら、いわゆる帝大系では古典ばかりやっている、外国語学校では現代語か現代文学しかやらないというのでは、お互いに片ちんば（ママ）ですから、そこで初めて両方が手を握って一緒にやりましょうという端緒がひらかれたことは非常にしあわせだったと思います」[28] と述べている。これは冰心作品が思いがけず果たした功績だといえるだろう。

戦前倉石と冰心は顔を合わせる機会がなかったが、戦後の冰心の訪日で二人の交流が加速したのは言うまでもない。1946 年～ 1951 年の日本滞在中に、冰心は倉石に中国の様々な情報を与え、また倉石の要請を受けて講演や講義をおこなった。冰心は東京大学で外国人女性としては初の客員講師となったが、倉石は「もともと東大というところは、西洋の学術輸入のためにひらかれたもので、（中略）蕃書取調処の後身だから（中略）中国の現代語に対する――あるいは中国そのものに対する関心のたかくないところであって（中略）わたくしはこれを打破しないかぎり、あたらしい学風はおこらないぞと考えて、転任早々、ちょうど在京しておられた謝冰心先生を時間講師におねがいした」[29] と書いている。冰心の講義は、東大の中国語教育に新風を吹き込んだことだろう。

さらに、倉石は新しい初級のテキストを作るにあたり、そのレコードの録音

を冰心とその娘たちに依頼している。そのテキストとは『ラテン化新文字[30]による中国語初級教本』[31]で、注音字母ではなくラテン文字で発音が記され、冰心たちによって吹き込まれた発音を「音の高さと強さの変化を直示する機械」にかけて曲線化したものが加えられた、非常に工夫の凝らされた画期的なテキストである。会話の内容は数人の女学生とその母親の極めて自然な日常会話で、冰心作品を使ったテキストではないが、冰心の発音を聞くことができるという点で、非常に興味深い資料であるといえるだろう。冰心はこのように日本の中国語教育に貢献したのである。

むすびに

『支那語教育の理論と実際』の序は「わが国で一番遅れている語学は、支那語とロシア語であると云ふ。この事実こそ、わが国が支那とロシアとの研究を怠つてゐた証据に取られても致しかたのないことである。（中略）わが国の支那語教育の方法が幼稚であり、自然、国民が支那に関する知識を欠き、その認識に乏しいことが、たゞ今の事態において如何に深刻な結果を生じてゐるか、あるひは将来も生ずる虞がないか、わたくしは、自分がその責任の一部を担当してゐるだけ、国家のため、常に憂慮に堪へないのである」で書き始められている。

本稿ですでに取り上げた『読売新聞』の池田桃川の記事は 1921 年に書かれたが、それから 20 年経っても日本の新聞記事や中国文学の翻訳には誤訳が「ざらに発見される」[32]状態であった。倉石は「支那人の文章は、たとへ口語体でも、相当に雅潔を尚ぶため、単に会話教科書だけの知識では、到底翻訳できるものではない」と指摘し、さらに誤訳は「文法に対する研究の不足と、一般に支那に関する智識が十分でないことに本づく様に思はれる。（中略）支那に関する智識の不十分なことは、辞典がまだ完備してゐないといふ弱味もあるが、健全なる語学力によつて、多くの書物から豊富な智識を吸収し、また多くの支那人から書物にないこと、書物に書き現されてないことを聞いて、次第に補つて行けるものである」[33]と書いている。つまり、倉石は日本の中国語教育を改

革し、日本人が中国語力を身につければ、中国を理解できるようになると考えているのである。

誤訳に関しては、当時吉川幸次郎と竹内好が、それぞれ誤訳可避、不可避の立場で論争していた。倉石は吉川と同じく誤訳可避の立場にあるといえる。倉石・吉川ら帝国大学系の学者と、竹内ら在野で『中国文学月報』（のちに『中国文学』に改称）を刊行した中国文学会グループでは、現代中国に向き合う姿勢が様々な点において異なっている[34]。本稿では詳しくは述べないが、竹内は『支那語教育の理論と実際』の倉石の意見に「僕は賛成である。多くの賛成者があるだらうが、その中で一番深く賛成するのは、僕および僕らであらうと思ふ」としながらも、「倉石さんの歩んでいる道は、絶対に行き止まりのない道である。絶対に失敗のない道である。このことは倉石さんの聡明さを十分に示してゐる。そのやうな安全な道を選んで、いさゝかの空虚をも感じない人は、僕などから見れば怕るべき強い人である。（中略）倉石さんにとつて、支那学とは、疑ふことすら想ひ及ばない実存の世界なのである」[35]と述べている。聡明で、安全な道を選び、いささかの空虚も感じないという人物像は、冰心及びその作品と重なるところがあるようでもある。

倉石は「わたくしは、現代作家としては、魯迅先生にお目にかかったのが因縁で、先生のものを読み、大学の教科書にもとりあげましたが、あとで謝冰心先生のものにぶつかり、ほんとに偶然ですが、たいへん清純な気持がして、すっかり読みました。もっとも、謝冰心先生にお目にかかったのは、ずっとあと、戦後に先生が日本に来られるようになってからですが、このかたとは家族的な交際が今でもつづいております」[36]と述べている。倉石にとって冰心は魯迅に勝るとも劣らない存在であるかのようである。それは当時の中国における評価とは乖離しているが、冰心作品を賞賛する倉石の言葉には何の後ろめたさも感じられない。そこに倉石の中国現代文学に対する姿勢がうかがえるし、竹内の不満もそこから生じると考えられるが、この竹内らとのスタンスの相違や、冰心との相似については、稿を改めたい。

なお、冰心作品は倉石のテキストだけでなく、様々なテキストに収録されて

いる。今回戦前に日本で出版された中国語テキストを調査したところ、13 タイトル、15 冊のテキストに冰心作品が掲載されていることがわかった。（本文末の一覧参照。）これは魯迅をもしのぐ数である[37]。神谷衡平、宮越健太郎等の教科書革新運動後に編纂された東京外国語学校（新外語）グループのテキスト（一覧①②③⑤⑫）は、東京外国語学校が戦前の中国語教育の「総本山」であり、主任を務めた宮越が「日本の支那語教育の総帥」のように目されていた[38]ことを考えると、多くの学習者に利用された可能性がある。

藤井省三は「近代化された社会では、一般的に外国文学研究者・翻訳家は体系化された教育制度により養成される。（中略）高等教育機関の外国語教育課程において、膨大な数の学生が外国文学に原語で接する。作品はこの若い読者層の前に現れる以前に、担任の語学教師・教科書編者らの解釈というフィルターを通過している。そして、これらの教師・編者が支えている教科書や語学教育など外国語教育制度は、教師らを再生産する制度でもあるのだ。その意味でも、外国語教育制度は一国の外国文化に対する姿勢と理解のありかたを大きく反映するものといえよう」[39] と述べている。

これらのテキストがなければ、冰心の日本における認知度はもっと低かったはずである。冰心作品は中国語テキストに収録されることで日本人に親しまれ、中国現代文学を理解する者が極めて少なく、翻訳には誤訳が散見され、研究論文も少ない、日中戦争の時期に、日本人の中国語力を向上させ、現代中国文学・文化に関心を向けさせる一助となった。

これらのテキストは、日本における冰心作品受容の一側面を示すと同時に、日本の中国語教育史の一端をも物語る資料であるといえるだろう。

＜冰心作品を収録したテキスト一覧＞

①神谷衡平編『現代中華国語文読本 前篇』1929 年 7 月、文求堂書店発行：冰心「寄小読者」通訊 3 ～ 5、7。通訊集『寄小読者』より抜粋。中国語での冰心の略歴や語注あり。

同『後篇』1929年9月：冰心「往事」（一）1、2、6、8、10、15節。散文集『超人』より抜粋。中国語での語注あり。

②宮越健太郎編『支那現代短篇小説集』1929年12月、文求堂書店印行：冰心（女士）「離家的一年」。巻末に極めて簡単な語注あり。

③宮越健太郎編『中国国語　第四冊』1935年3月、冨山房印行：謝婉瑩「笑」。数箇所に注音字母。

④松枝茂夫著『支那現代文3』1933年6月、共立社発行：謝冰心「笑」。作品原文の前に冰心の紹介文、原文の後に日本語訳と語注あり。

⑤神谷衡平編『支那語基本教科書 下巻』1935年12月、文求堂書店発行：冰心女士「離家的一年」。全五十課の課文の後に「課外」として収録。

⑥倉石武四郎著『支那語読本 巻一』1938年9月、弘文堂書房発行：第十課に冰心「雨」。冰心の簡単な紹介と「此に採録せるは小説『寂寞』の一節、冰心小説集に載す」との説明あり。簡単な語注附き。第十五課に冰心「笑」。「笑は小説月報第十二巻第一期に載す」との説明あり。簡単な語注付き。

⑦北京近代科学図書館編（責任者　山室三良）『中国現代文読本』1938年10月、北京近代科学図書館発行：謝冰心「一個慈藹的兵丁」。巻末に冰心の略歴、ごく簡単な語注あり。

⑧倉石武四郎著『倉石中等支那語 巻三』1940年11月、弘文堂書房発行：冰心「寂寞」。倉石『支那語読本 巻一』所収の「雨」（「寂寞」）とは重複しない箇所を節録。注音字母付き。
同『巻四』1941年3月：冰心「寄小讀者通訊」。通訊10の節録。注音字母付き。

⑨冰心女士著、倉石武四郎編『寄小読者抄』1941 年 4 月、恒星社発行：通訊 1・2・5・7・9・10・14・17・28。謄写版。注音字母付き。

⑩王化編『高級華語新集』1941 年 7 月、文求堂書店刊：冰心「笑」。節録。簡単な冰心の紹介文あり。

⑪小川壽一譯『高級華語新集總譯』1941 年 7 月、文求堂書店刊：冰心「笑」。節録。和訳のみ。この本は『高級華語新集』の全和訳集である。

⑫小原一雄・王之淳共編著、宮越健太郎校閲『古今中国小説小品文精選』1943 年 5 月、外語学院出版部発行：冰心「女児節」。「寄小読者」通訊 23 だが、「女児節」とのタイトルが付けられている。作品本文の前に冰心の略歴等の紹介文、本文の後に「注解」（語注）あり。いずれも中国語。

⑬謝冰心著、倉石武四郎編『南帰』1943 年 12 月、生活社：冰心「南帰」。編者名なし。倉石武四郎『漢字・日本語・中国語』倉石武四郎著作集第二巻、くろしお出版、1981 年 6 月、巻末の「倉石武四郎博士論著目録」08「支那語教科書（戦前)」に「他シリーズと同じく倉石武四郎編」とあるのに基づく。

注

1）　本稿は 2012 年 10 月重慶で開かれた冰心文学第四届国際学術研討会における発表を基に、加筆修正したものである。

2）　萩野脩二『謝冰心の研究』（「一、冰心の心――大海」「九、日本への紹介」「十、プリミティブの強さ」）朋友書店、2009 年 8 月 1 日

3）　虞萍『冰心研究――女性・死・結婚――』（第 2 章　冰心の日本への旅と日本における冰心研究の概観）汲古書院、2010 年 12 月 24 日

4）　荻野によると、冰心の作品は「時には紹介者の心をとらえ、時には紹介者の心

のよりどころとして、か弱い光明をともしてきた」(『謝冰心の研究』284 頁)。冰心作品にはプリミティブ(人間が持つ初発の情感、『孟子』のいう惻隠の情)の強さがあり、「この感情は損得利害を脱した人間のプリミティブな情感、すなわち人間の社会的存在を云々する以前の一個人として生きている生活感情である。だからプリミティブというのだが、あまりにも原初的発露であったから脆弱と言わざるをえない。しかし殆どの思考や情感が弾圧の対象とされる時代にあっては、却ってプリミティブであることが強さを発揮した」(同 326 頁)。荻野はこのプリミティブの強さが冰心文学の紹介者たちの態度補強の役割を果たし、紹介者たちの因って立つ文学観に外圧が加えられた時に支えとなった。プリミティブの強さこそが冰心文学の魅力であり、だから紹介者たちは「過去の作家」だと言いながら冰心作品を翻訳し続け、論じ続けているのだと結論付けている。

5) 虞『冰心研究――女性・死・結婚――』65 頁

6) 周作人「関於“愛的実現”的翻訳」『晨報副鐫』民国 11 年(1922 年)8 月 28 日

7) 萩野『謝冰心の研究』「第 9 章、日本への紹介」注 19、302-303 頁、「第 10 章、プリミティブの強さ」310-312 頁

8) 周「関於“愛的実現”的翻訳」

9) 六角恒広『近代日本の中国語教育』1961 年 12 月、播磨書房及び同『中国語教育史の研究』1988 年 7 月、東方書店を参考にした。

10) 六角『近代日本の中国語教育』及び安藤彦太郎『中国語と近代日本』1988 年 2 月、岩波新書、岩波書店を参考にした。

11) 安藤『中国語と近代日本』2 頁

12) 安藤『中国語と近代日本』46 頁

13) 六角『近代日本の中国語教育』25 頁

14) 中国語教育を担った私立・民間の学校については、本稿では言及しない。

15) 藤井省三『東京外語支那語部　交流と侵略のはざまで』朝日選書 458、1992 年 9 月、朝日出版社

16) 藤井『東京外語支那語部　交流と侵略のはざまで』27-28 頁

17) 倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』岩波書店、1941 年 3 月

18）倉石武四郎『中国語五十年』岩波書店、1973 年 1 月

19）宮島大八『官話　急就篇』善隣書院は 1904 年 8 月初版発行。1933 年 10 月改訂して『急就篇』と改題するまでの約 30 年間に 126 版を重ね、その後も 1948 年 2 月重訂版を出すまで数十版（1945 年 11 月まで改訂 45 版）を重ねている。「昭和 20 年まで、（中略）中国語を学ぼうとする初学者は、誰でも一度は手にしたことのあるテキストである」六角『近代日本の中国語教育』95-96 頁による。

20）倉石『支那語教育の理論と実際』191 頁

21）倉石『中国語五十年』47 頁

22）倉石『中国語五十年』52 頁

23）本文末＜冰心作品を収録したテキスト一覧＞⑥⑧⑨⑬。

24）倉石がこれらのテキストを作成した当時の中等学校は 5 年制（おおむね 12 歳〜 16 歳）、高等学校は 3 年制（おおむね 17 歳〜 19 歳）だと考えられる。

25）倉石『支那語教育の理論と実際』203 頁

26）倉石『支那語教育の理論と実際』245 頁

27）倉石『中国語五十年』47 頁

28）倉石『中国語五十年』53-54 頁

29）倉石『中国語五十年』90-91 頁

30）1920 年代末から瞿秋白等によって考案されたラテン文字による中国語の表記法。1930 年代から 1940 年代にかけてソ連の中国人移民や中国北部の辺境で使われた。

31）倉石武四郎著『ラテン化新文字による中国語初級教本』岩波書店、1953 年 6 月。レコードは倉石武四郎編集・監修『ラテン化新文字による中国語模範会話』初級（AK-221-2）、日本コロムビア、1952 年。

32）倉石『支那語教育の理論と実際』79 頁

33）倉石『支那語教育の理論と実際』78-82 頁

34）渡邊一民『武田泰淳と竹内好　近代日本にとっての中国』みすず書房、2010 年 10 月、40-51 頁を参考にした。

35）竹内好「支那學の世界」『中国文学』第 73 号、1941 年 6 月。

36）倉石『中国語五十年』53 頁

37）藤井『東京外語支那語部　交流と侵略のはざまで』86-87 頁に、昭和戦前・戦中期に日本で刊行された中国語テキストのうち、魯迅の作品を収めたもの（10 冊）が挙げられている。

38）竹内「支那語の教科書について」『中国文学』第 78 号、1941 年 10 月。藤井『東京外語支那語部　交流と侵略のはざまで』152-157 頁、秋吉收「『中国文学（月報）』と中国語――竹内好らの活動を軸として――」注 8、『中国文学論集』第 35 号、2006 年 12 月を参考にした。

39）藤井『東京外語支那語部　交流と侵略のはざまで』25-26 頁